

# トマト赤のイズニックタイル

*Iznik Tile in Tomato Red*

author 竹多 格 | Itaru Takeda

ただい・いたる—— INAXライブミュージアム主任学芸員/1952年生まれ。京都工芸繊維大学大学院無機材料工学専攻修了。  
1979年、伊奈製陶(現・INAX)入社。外装タイル工場技術課、仕入商品管理、博物館設立準備を経て、現職。

## [クローズアップ・タイル]

### 多彩草花文タイル——1

このタイルは、左右に同じ柄のピースをつなげてタイル張り壁面の縁飾りに使われた。盛り上がりのある「トマト赤」の部分は、水分の少ないスリップを使って絵付けされるが、水分がすぐに下地に吸い込まれて固まってしまうために筆描きできない。そのため、細いストローのようなものを使って線書きや面塗りをしたと考えられている[16世紀/64×138×16mm/イズニック]



## [タイルのデザイン]

### イズニックタイルの文様——2-5

最盛期の16世紀には、「サズ」と呼ばれる、風にそよぐノコギリ菌のような形をした細長い葉や、「ハタイ」と呼ばれる自然の花や種を合体させたような合成花も登場した。トルコでは人々は非常に草花を好んだため、チューリップやヒヤシンス、カーネーション、バラなどが数多く写実的に描かれた  
2—多彩草花文タイル[16世紀/96×146×15mm]|3—白地多彩草花文タイル[16世紀/190×225×15mm]|4—白地多彩草花文タイル[16世紀/225×190×15mm]|5—白地藍彩草花文タイル[15世紀/190×162mm(六角形の1辺95mm)]|いずれも製作地はイズニック

## [イズニックタイルのある風景]

### トプカプ宮殿謁見の間——6

大きなドーム天井を持つ謁見の間は、16世紀後半に建築家・シナンがムラト3世のために建てたものだが、その後18世紀中頃に修復を行っている。白地藍彩のタイルはオランダからの輸入品といわれている。また、同宮殿のハレムの中の寝室には「トマト赤」のタイルが張られている

- イズニックは、トルコの古都イスタンブールの南東約90kmにある、現在は人口15,000人ほどの小さなまちである。その歴史は古く、紀元前310年に「ニカイア」と命名されて以来、ローマ帝国時代から東ローマ帝国時代を経て、オスマン帝国の時代[1299-1922年]にイズニックと呼ばれ、現在に至る。16世紀中頃の首都の造営事業では、著名な建築家・シナンが「トプカプ宮殿」や「スレイマニエ・モスク」、「リュステム・パシャ・モスク」などのオスマン帝国の歴史的建造物を意欲的につくったが、そこに使われたタイルのほとんどがイズニック製であった。良質の陶土と薪に恵まれ、首都にも近いイズニックは、オスマン帝国の中心的な窯業地として発達した。
- イズニック陶器が本格的な始まりを見せるのは15世紀末とされるが、その後、16世紀の中頃にかけては、白地藍彩の文様にも中国の青花磁器の影響が出てきた。そして、それまでの赤色素地に代わって、白地の白さを際立たせるために、石英の粉末を主原料としたイズニック独特の陶器が考案された。磁器のような滑らかな下地を実現するために、素地の上に白のきめの細かいスリップ(高濃度の泥水)を掛け、流麗な絵付けも可能になった。
- 16世紀中頃から17世紀中頃にかけては、この白地の上に絵付けして無色透明の釉薬をかけた多彩の陶器やタイルが製作された。模様を描くための顔料は、従来の青に加えて、紫、黒、薄緑、緑、水色、そしてイズニック独特の「トマト赤」が考案され、チューリップやカーネーションなどの花の色を中心に、多彩の華やかさを一段と引き立てた。釉薬が掛かって光沢のある赤は、高く盛り上がり上品な色を呈し、それ以前に見られたイランや中国の赤とは色や質感において全く異なり、触覚と視覚効果において新しい美術的価値を付加した。このようにしてイズニック陶器は全盛期を迎えた。
- 「トマト赤」の顔料は、鉄を含む石英を粉末にして水溶きしたものだが、鉄の含有量が少ないため、できるだけ水分を減らして濃度を高くしたものを厚く盛り上げて塗る必要があった。当時の陶工は、この難題を克服するため、この水溶液の濃度や描画道具などに工夫を重ね、後世からも評価の高い「トマト赤」を見事に完成させたのである。
- ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。

